



現代民俗学会 二〇一六年度年次大会

2016年5月21日(土)

10:00～

東京大学東洋文化研究所大会議室

プログラム

個人研究発表 10:00 ～ 12:00

10:00 ～ 10:25 第一報告

馬路（神奈川大学歴史民俗資料科学研究科）

「徽州の女祠に関する考察」

10:30 ～ 10:55 第二報告

桜木真理子（筑波大学人文社会科学研究科）

「病いの境界はどこか—ハンセン病経験者の語りにみる医療と経験—」

11:00 ～ 11:25 第三報告

菅豊（東京大学東洋文化研究所）

「宮本常一が予期しなかったこと—文化政策、民俗学者の介入、そして順応的管理—」

11:30 ～ 11:55 第四報告

川森博司（神戸女子大学）

「現代民俗誌への模索と課題—『高砂市史』における試みから—」

シンポジウム 13:30 ～ 17:30

「民俗」にはまる人々—「民俗」中心の民俗学を超えて—

発表者

森田玲（玲月流 篠笛奏者）

有本尚央（甲南女子大学）

塚原伸治（茨城大学）

森田玲「祭は誰のものか？—イベント化する神賑（かみにぎわい）行事—岸和田祭と地車（だんじり）と私—」

祭は神事と神賑行との絶妙のバランスの上で継承されるが、時に神賑が暴走し祭がイベント化する。岸和田祭はその典型だ。私は地車の高速曳行化に伴う囃子の衰退を憂い、大学を中退して笛屋を営み始めた。平成十八年に祭が土日開催となって後は「祭は誰のものか？」という根本を地元に関わりながら、子供囃子教室、各地の祭紹介のシンポジウム、神社記念誌の編集、担い手との勉強会の開催などに力を入れている。本発表は、地車文化圏で生まれ育ちながらも祭を離れざるを得なかった私の、二十年をかけたアイデンティティの回復の経緯と、地元との関わりの報告である。

有本尚央「祭りを語る／騙るのは誰か—岸和田だんじり祭における囃子の「改善」運動を事例に—」

本報告は、本企画の第一登壇者である森田玲氏の諸活動を社会問題の社会学的視点から「クレーム申し立て活動」と「状態のカテゴリー」の構築に関わる実践して捉えることを通して、祭りに「はまる人」がいかにしてそこへと至るのかについて考察する。これは、社会学的な祭り研究であると同時に、本企画が主題とする「はまる人」について、アカデミックな研究者の立場性を含み込んだ祭りに関わる〈中心と周辺〉の問題系を攪乱する試みでもある。

塚原伸治「祭りに魅了される人々—「民俗」にはまるのは誰か—」

本発表では、千葉県香取市の「佐原の大祭」におけるふたつの出来事について語る。「外部」であった人々の調査や情報交換が、祭礼への新たなチャンネルを創出した例、あるいは祭礼の担い手による新しい調査活動が、発表者自身やその身近な人々がアクターとなって行われた例をもとに、「民俗」について調査し記述するという活動が、情報環境やリテラシーとの関係において変化しつつある現状について概略する。